

## 医史学にみる「習合」と「分離」

西巻 明彦

北里大学東洋医学総合研究所／日本歯科大学医の博物館

医史学において「折衷」という用語は一般に使用されているが、「習合」や「分離」という用語はあまり使用されていない。「漢蘭折衷」という概念は医史学全体で使われており、多数の知見が多く述べられている。「習合」「分離」は宗教関係で用いられることが多い。

江戸時代の学問は、津和野藩の国学者野々口隆正は『神道道しるべ』の中で、和学を神道と歌道、漢学を儒家と道家、仏学を天台、真言、禅、念仏、八宗兼学、蘭学を天学窮理と医道に分類している。野々口隆正は平田篤胤の門人で、同時に洋学受容に熱心で、1818年長崎へ5か月遊学し、通詞吉雄権之助より天学窮理学と蘭学を学び、積極的に活用したため、「蘭学習合」と批判されている。津和野藩の教学改革は野々口隆正の思想によるもので、1849年に国学（津和野本学）と蘭医学が養老館にもうけられている。このことについて佐野正巳氏は「隆正の教学思想内容（国学と蘭学の習合）からきていると考える。」と述べている。野々口隆正自身、『古伝通解』の中で「隆正はわが古伝の見合わせに外国の書を取り用ゐるをききはつりて、隆正は漢ごころなり、仏を引いるものなり、蘭学を合するものなりなど評するものあるよし。儒学をしらぬものは儒を合すと思ふめり。蘭書をしらぬものは蘭を合すとおもふめり。合するにあらず。かなたよりをりをり合ふことのあるよりこれをいふなり。」と記している。これは国学を中心とする隆正の思想に、西洋の学問を折り込んで国学そのものを高めていると考える。佐野正巳氏自身「国学と蘭学。いずれも江戸の中期に盛行をみた新しい学問で…中略…国学と蘭学の習合こそ幕藩体制を崩壊にみちびく一大要因であった。」と主張している。医史学の場合、すでに「折衷」という用語が「漢蘭折衷」として使用されているが、江戸時代一般化していった国学、仏学、漢学の中の道学についての関係性について語られることは少なかったのではないかと考える。一例をあげるならば、龍野藩の南木龍江は家学の良山以来の古方派を継承しながら池田塾、幽蘭堂、淇園塾に入門し、さらに大槻玄沢の芝蘭堂に入門している。このため、良山学、朱子学、古義堂、易にもとづく開物思想、蘭医学などがからみあい、重なり合って南木龍江の思想を形成したと思われる。事実南木龍江自身『医法新話』の中で「近世謂古方家に非ず、後世者流に非ず、大いに諸家の説に異なり」と記している。演者は基本的に『折衷』も『習合』も用語としては大きな意味の差異はないと考えるが、漢蘭という二項的だけではなく、多元的に分析する必要もあるのではないかと考える。

「分離」について明治新政府が1868年に出された神仏判然令による神仏分離が有名である。これは基本的には神道と仏教、神と仏を分離することが目的であった。これは神道国教化の方針であり、かならずしも仏教否定ではなかったが、廃仏毀釈運動もおこった。しかし、神道国教化のための神仏共同布教体制が敷かれたりしたが、1873年キリスト教禁教令が廃止され、1877年に教部省も廃止、神道国教化は放棄された。一方医学は1874年医制が公布され医薬の許可制が定められ、1875年から医術開業試験に西洋医学が採用されたことにより、実質的に「習合」されていた従来の医学の中から、西洋医学が「分離」されたと考えることもできる。神仏分離令により仏教は否定されていたわけではなかったが、その復活は早かった。医学においては必ずしも漢方医学そのものは否定されたわけではなかったが、資格試験に西洋医学を採用した以上、その復活には大変長い時間がかかった。

今回、医学の歴史的経過の中で、「習合」と「分離」の用語を使ってやや斜めにみた考察を行った。